

A young child, likely a toddler, is the central figure in the image. They are wearing a light pink long-sleeved sweater with a heart-shaped pattern on the chest and a white knit beanie. The child is holding a dandelion seed head in their right hand and looking up at it with a smile. They are standing in a field of many dandelions, some of which are in the foreground and some in the background. The background is a soft-focus view of a park or forest with green trees and a path. The overall lighting is bright and natural, suggesting a sunny day.

# ひとりひとりを大切に

乳児、1・2歳の発達  
＝自我の発達を中心に＝

参考文献「発達が分かれば子どもが見える」  
乳幼児保育研究会

# 発達の特徴とは

一人ひとりの発達過程知り、それに応じた援助をしていくことが重要である

## 発達の特徴

- ・生きる力の基礎を培う ……生涯にわたる生きる力の基礎が培われる
- ・人への信頼感が育つ ……愛され信頼されることにより、情緒が安定する
- ・環境へのかかわり ……信頼できる大人が側にいるだけでみずから行動する
- ・子ども同士の関わり…おもちゃの取り合いをする中で、自分と同じ要求する友だちの存在を知る
- ・発達の個人差 ……一人ひとりの心身の発達の個人差は大きい
- ・あそびを通して育つ…仲間との関係を育み、その中で個の成長も促される



# 五感の発達

五感の発達・・・一つひとつ独立しているのではなく、脳も含めてお互いに密接にかかわり、影響を与えながら発達していくもの

聴覚

胎児の頃(20週)血液の流れる音、28週過ぎると外の音や声が聞こえるようになる

視覚

目が出来るのは妊娠4～5週、18週には神経がつながる。20週後半には外の明るさに反応する。 新生児0.02程度



- 臭覚 20週には舌や口腔内の感覚ができているので  
味を感じる
- 味覚 28週には、甘いと苦いがわかる、甘いものを  
好むのは本能的
- 触覚 8週で指しゃぶりのような動作をするほど、触覚  
は原始的なもの。手が口に触った感覚が脳に  
伝わり、再び脳が「手を動かす」という指令を出  
し、触角 脳 → 運動 → 脳 という神経回路が  
発達する

# 乳児保育の理念

- ☆ 生まれながらにして持ちそなえている五感を大切にし、感性を育て好奇心や探究心を培う  
発達過程のなかで知力になる
- ☆ 一人ひとりの最善の利益を保障するなかで、
  - ・ 特定の大人との愛着関係を築く
  - ・ 生活リズムを整える
  - ・ 基本的生活習慣の確立
  - ・ 友だちとの関わりのなかで自我の芽生えを養う
- ☆ 保護者との信頼関係を築く



## ☆愛着行動、基本的信頼感、自己肯定感が不可欠

子どもの欲求(要求)丁寧に応答する行為と柔らかい感触と子ども自身の自由な探索活動の保障がなければ、愛着関係は育たない。

アタッチメントする他者が日常的にいることで、不安や欲求不満があるときに、その人に寄り添えることができるため、子どもの心の中にその人への信頼感が育ち、やがて他者にも信頼感を身に付けていく。自分は無条件でありのまま愛されているという感覚になる





# 乳児保育の実際

乳児保育の高まりに応える(利用率H30・36. 6%)

待機児童の増加・・・88. 6%      \* ここでいう乳児は低年齢児も含む

＜乳児14.4% 1・2歳児74.2%＞

認可保育所に希望しながら入園できない子ども

認可保育所・・・児童福祉法児童福祉施設最低基準を満たしている保育所

公立保育所

社会福祉法人立私立保育所      家庭的保育事業、小規模保育所、

院内保育所

幼保連携型認定こども園      事業所内保育施設

企業立保育所

認可外保育所

ベビーホテル      東京都認証保育所



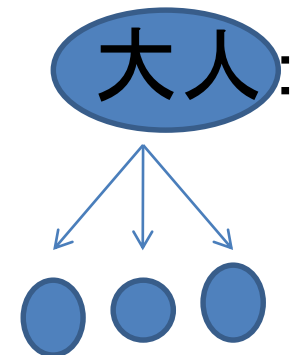
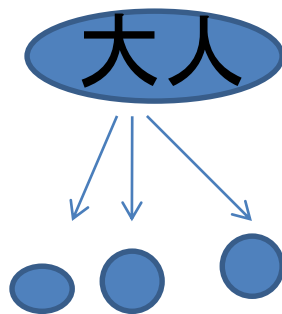
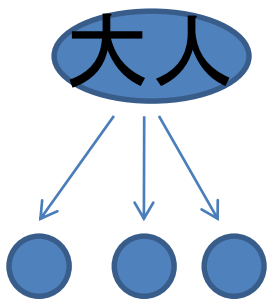
# 愛着関係と担当制

愛着関係とは

特定の大人との関係を築くことにより、安心して生活できるようにする

保育所の場合は

例えば 0歳児クラス 9名      保育士 3名







# 生活リズムー1

## ■生体リズム

一日25時間のリズムをもっている。体温も朝方最も低く、昼過ぎから夕方にかけて高くなる。地球の24時間のリズムの同調因子の最も影響を受けるものは光による昼と夜の周期であると考えられている。

## ■睡眠覚醒リズム

人は当たり前、暗くなれば眠り、太陽の光で目がさめるようにできている。日中太陽の光をサンサンと浴びてしっかり覚醒する。夜は電気を消して真っ暗い中で睡眠をとる、こうした外部環境からの自然な刺激により「睡眠覚醒リズム」はつくられる。新生児の全睡眠におけるレム睡眠の割合は50%

## ■生体リズムの発達と生活リズム

生後8週くらいまでは、空腹になると目覚め授乳で満腹になると眠るという昼夜関係ない。6ヶ月から7ヶ月になると眠りが夜にまとまりはじめ、一日24時間のリズムになっていく。

## 生活リズムー2

・・・睡眠・覚醒リズムと共に授乳・離乳食の与え方を工夫し、入浴・散歩など生活にアクセントをつけたり、帽子、エプロン、敷物などつけて、気持ちにもアクセントをつける  
活動から活動への移行がスムーズにいくように援助しながらさまざまな言葉かけによって不快の状態から快適な状態へ予期する

### ○見通す力をつける

子どもの行動の評価をして行動に区切りをつけることがやがて一日の生活が規則的に進められる身体でリズムを身につけることにつながる。

### ○生活が主体的になる

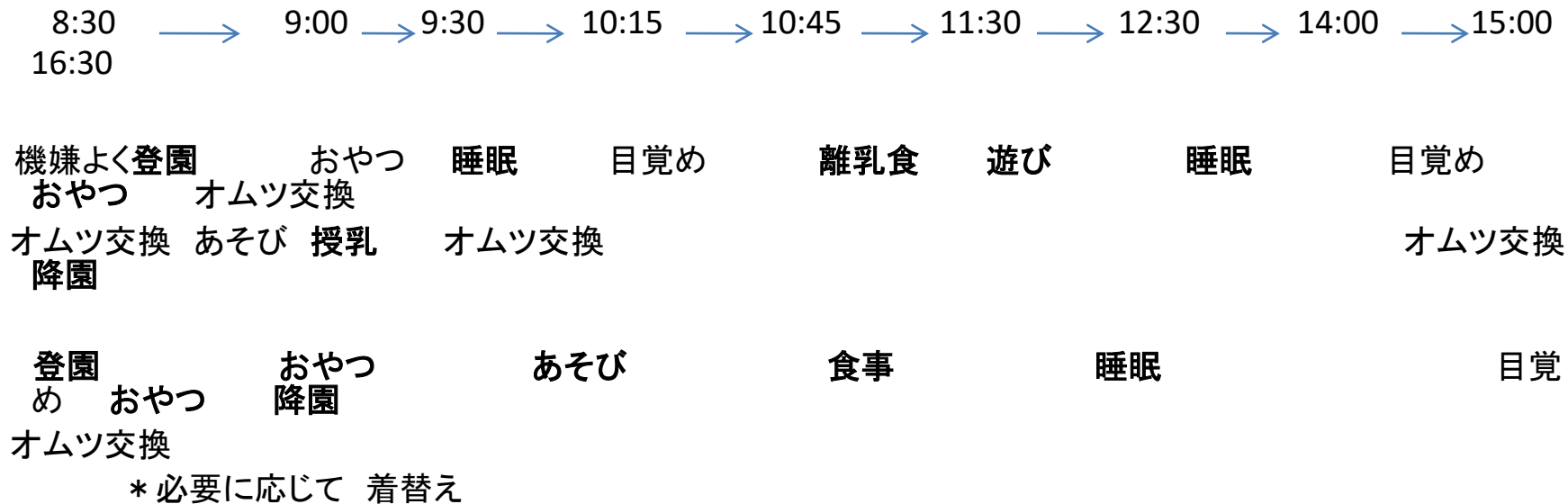
乳児クラスは生体リズムに調和した生活リズムを考えて保育をしていく。  
生活リズムの獲得によって、子どもが自分の生活に主体的に立ち向かう姿勢をつくる

### ○健康的な生活ができる

# 保育所の日課＜登園から降園まで＞

日課・・・■年齢，月齢によって異なる ■家庭の生活リズムから無理なく  
■季節によっても変えていく 園のリズムに移行できるように

## 乳児の生活 生命の維持や情緒の安定 あそび



# 基本的生活習慣

睡眠・・・SIDS(乳幼児突然死症候群)

うつ伏せ寝を避け、睡眠時にチェック表(5分おき)利用

特に入所して間もない頃の保育は複数の目による観察と注意



機嫌、顔色、皮膚の状態、体温、泣き声、全身症状、仰向けで寝てるか  
寝具のかけ方は大丈夫か、嘔吐はしていないか、まわりに玩具はないか  
一人ひとりが安心して休息をとれるように生活リズムに即し、環境を整える

食事・・・楽しい雰囲気の中で、手やスプーンなどを使い、自分で食べようとする  
気持を育てる。離乳食を与えるときの配慮を考える

排泄・・・おむつ交換時には声かけをする。一人ひとりの排泄の間隔を重視

着脱・・・丁寧に関わっていき、意欲を育てる

清潔・・・保育者が一緒にやりながら、習慣づけていく

# 発達を促す環境（誕生～4ヶ月）

## 新しい発達のカ・…自分の意志で微笑む



### 社会的微笑

- 中枢神経系の成熟が一定段階に達する。それにより、生理的な基礎をしっかり持ち、運動系の末端部分まで力がみなぎる。
- ⇒興味・関心が自由に動く身体をつくり出す 首がすわる→寝返り
- 相手を見つめるとき、目の焦点がよく合う。視力も高まり、自分から主体的にじっと見つめ、微笑みかける。
- ⇒日常的なかかわりが、「愛着」の基礎をつくりだす→抱っこされ、話しかけられ、あやされる経験の繰り返しが大切
- ⇒目と手の協応関係の成立

◎ 言葉と交流

大人からの言葉かけを受け止め、快と不快  
の感情が分化

「快」・・・笑顔

「不快」・・・泣く(涙が見られる)

◎「見る」ことからあそびは始まる

おもちゃを揺らして見せたり、握らせる

◎ 腹這い・・・機嫌の良い時に腹這いを  
させ、大人と向かい合う

◎わらべうた

◎社会的支援・・・4ヶ月健診に誘う





# 発達を促す環境(4～6ヶ月)

飛躍の時期・・・自分自身で周りの世界にトライ  
原始反射の消失

○ 原始反射に対して大脳皮質による随意制御が進み、ほとんどの原始反射が消失。

➡ 周りの世界と取り結ぶ発達的な関係がゆたかになる

○睡眠脳波が出揃う

➡朝陽をあびることで「あさ」が確認でき生活リズムの土台ができ、昼間は10時間くらい目覚める

○中枢神経系の成熟が進み、感覚系と運動系の随意的な協応(自分の意志でコントロールできる動き)が出来始まる

➡寝返り→ずり這い→四つ這い→座位→つかまり立ち



○ 生理的自立が進む

➡ 乳歯が生え、自己免疫へ切り替え

○ 大脳皮質の神経回路網の形成が進む

➡ 運動制御がさらに随意的になり、平衡反応が見られるようになる

➡ 移動のも手の操作にも四肢を交互左右や同時に強調させて使う

○ 唇をしっかりと閉じ、離乳食を舌の上下運動と顎の上下運動で潰して食べる

➡ 離乳食の開始・・・個人差に配慮を!!



## ◎ 言葉と交流

- ➡ 人見知りが始まる次期なので、親しい保育者と一緒にゆったり過ごす時間を大切に！
- ➡ 7～8ヶ月になると自分から相手に対して気持ちを通い合わせるようになる
- ➡ 抱っこをしてもらいながら、片手で物をとると左右どちらからでもでも自由に持ちかえる事ができる



◎動きだすと手に触れるものを何でも引っ張ったり、コンセント穴も好奇心の対象、環境に十分きをつけましょう（床の上のちいさなものは口に入れる）

# 発達を促す環境（6ヶ月～10ヶ月）

## ● 第2の新しい発達のカ・・・・自分の意志で動く

生活やあそびの主人公に

○乳児期前半での脊髄・脳幹・間脳の神経のネットワークの形成を基礎として乳児後半にかけては小脳—大脳基底核系による運動制御が進み、さらに大脳皮質系のネットワークが成熟が加わり坐位や立位でバランスをとる力が増す。目標を捉えて移動したり、手指を使って物を操作する力も高まる

○「ジブン」がわかるようになる

➡「自分でしたい」という気持ちが芽生える

「人—もの—人」を介した世界が広がっていく



○ 脳の重量が18ヶ月までは1000を超え、大泉門がほぼ閉鎖する

○ 膀胱からの排泄の間隔が2時間をこえる

○ 睡眠と覚醒のリズムが安定してくる

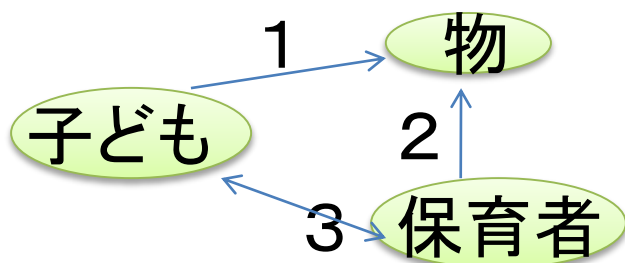
➡ 午睡も2回寝へ

◎ 言葉と交流 ➡ 三項関係をつくりだす主体へ

- ・自分の名前を呼ばれると振り返ったり、「ジブン」が分かる
- ・「ワンワンきたね」などの呼びかけに、表情で応える
- ・言葉と物が結びつき、大人と共有する
- ・言葉がなくても手さしや指さし、表情の変化で自分の要求

## ◎三項関係をつくる言葉がけを！

- ・ 子どもの興味に寄り添い共感し、子どもの言葉にならない思い気持ち・ゆびさしを受け止め、言葉で返していく



## ◎ 探索活動の保障

- ・ 一見、いたずらと思える活動（探索活動）のなかで、子どもは意欲的にモノに立ち向かう力や「ナンダロー」と思って確かめる好奇心のような力を育む。保育者とイメージを交流しあい次の活動へとつなげ、あそびをゆたかにしていく。→ 「みたて・つもり遊び」に発展



# 発達を促す環境(10ヶ月～18ヶ月)

自我の誕生・・・自分の思いを一直線に

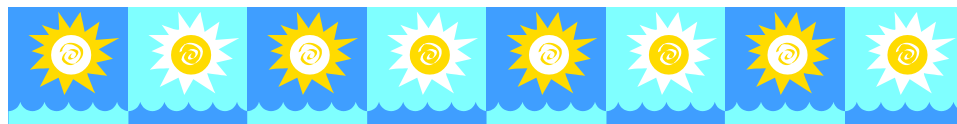
└─ 直立二足歩行・言葉の獲得

└─ 自我の誕生・道具の利用

○ 自我が芽生えることでしっかり「ダダコネ」をし始める。直線的に要求をぶつけ、「我」を通す。1歳3ヶ月頃は気持ちの立ち直りができないが、だんだんと大人の言葉かけや提示も受け入れられるようになる。子どもたちの「大きくなりたい！」願いを受け止めたいものである。

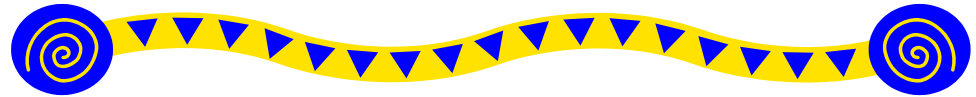
- 大好きな人に向かって、障害物があっても別の方向から回り込んだり方向転換もできる
- 自分の思いを具体的な行動によって表現するようになり、直立二足歩行や手指をしっかりと使った道具操作、おもちゃであそぶこと、言葉の豊かな展開を支えることにつながる
- 物をしっかり目で捉えるようになり、床に落ちている小さなものや見慣れないものをみつけて拾いあげる・・・環境整備

## ◎言葉と交流



- ➡ 道具への関心が高まり、人形にミルクを飲ませる真似をする
- ➡ 少し遠くの車や犬をみつけて言葉で表現したり、指さして聞かれた物を言葉や指さして表現する
- ➡ 人との関わりが広がり、何かたずねられると知っているものを指さして知らせるが、親しい人の姿が見えなくなると追いかける。しかし、たどり着くと安心して、自分で感情を立て直すことができる。
- ➡ 一つの遊びにこだわるが、複数のちがうものを提示すると、自分で選び気持ちを切り替えていくことができる

## ◎ 自我と社会性



- ➡ 感情表現が豊かになり、おどけたり、戯れたりする。驚き、恐れ、怒り、嫉妬、不安、不満、悲しみなどの感情が表現され始める。
- ➡ 激しくないたり、地に伏してだだこねたりという力が強まり、宥めすかしても起き上がらないというときは、子どもの気持ちに共感し気持ちの揺れを受けとめていく
- ➡ 「靴をはいてお外に行こうか？」と声かけすると靴がある玄関の方に向かう等、見通しがもてるようになる

# 発達を促す環境（1歳半～2歳半）

自我の拡大期・・・「自我の力を発揮して」

「ジブンデ！」「ジブンノ！」

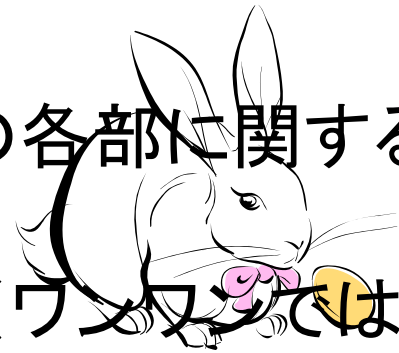
## ○ 1歳半の節目を越える

自分や周りの世界の変化を捉える力がつき、日常生活のいろいろな場面で活動を「切換え」たり、「折り返し」したりする力につながっていく

- ➡ 歩行、道具の利用、表情やしぐさや言葉での表現力がお互いに関連しあいながら豊かになる
- ➡ 自分の思いを具体的な行動によって明瞭に表現し、“だだこね”による自己主張も強くなる

## ◎ 言葉と交流

- ・自己認識が深まり、自身の体の各部に関する認識が育つ
- ・動物をすべて「ワンワン」から「(ワンワンではない)ニャーニャ」
- ・友だちと手をつなぐことができるようになる



## ◎ 自我と社会性

- ・鏡に映る自己像を見てそれが自分だと分かる
- ・自分の持ち物と友だちのものと区別がつき、自分の持ち物にこだわる
- ・新しい場面に対して慎重になる。「心の杖」など持つ

## ◎ 社会的支援・・・1歳6ヶ月健診の受診をすすめる



## 第一反抗期・・・自我の表現を受け止めて

○内臓器官が成熟（感受性の高まり）

- ➡ 心臓・肺・胃・腸・膀胱などの内臓組織や機能が中枢神経系とともに成熟する
- ➡ 新しい場面での感情の分化・立ち直り・内面化も進み、記憶力も増大し、身辺自立に自ら挑戦する
- ➡ 感受性の増大とともに新しく知った世界をそれまで以上に怖がったり、夜泣きがあらわれる
- ➡ いろんな味や匂い、お腹がすいたとか、おしっこがでそうだという内臓感覚もたかまる

## ◎ 言葉と交流

- ➡ 目の前にないものや目の前にないことを表現する
- ➡ 2語文が生まれ始める 「ワンワン、イタ」「オチャ、チョウダイ」  
自分の持っているものが友だちと見比べて、「オンナジ」  
「イッショ」等わかり始める

## ◎ 自我と社会性

- ➡ 1歳代で誕生した自我が2歳代で大きくなる。自分の気持ち「言葉にならない思い」を受け止めて欲しいという願いが反抗や抵抗としてあらわれる
- ➡ さまざまな自己主張が意志を表現し、実現しようとする自我が強くなることにより、自分をさまざまな面から認知している

# 発達を促す環境(2歳半～3歳)

自我の充実期・一人前の「ワタシを認めて！  
ボク

○ 2次元の認識を獲得

→異なる2つの活動を一つまとめ、自己表現する

→対認識をとらえはじめる

○ 「～ではない～だ」という心の働きを色々なものにぶつけていく

→対の世界を対比させながら対象の特質をキャッチしようとする

## ◎ 言葉と交流

- ➡ 話し言葉が爆発的に増える。周囲の人や事物に対応する理解が増え、それとともに物の性質も言葉で表現し始める。
- ➡ 自分の気持ちを表現すると同時に相手の気持ちの変化にも気付く等**感受性が豊かになる**
- ➡ 「問い」「答え」の関係が分かり始め**「ナンデ？」「ドウシテ？」**とたずねる
- ➡ 自分の姓一名、男女、年齢、クラスの名前などがわかり言える



## ◎自我と社会性(生活・あそびに表れる発達力)

➡「自我の充実」によって、

- ・自分の領域と他者の領域とを明確に見分ける力がつく
- ・物を配分する時も、自分と同じように配分できる
- ・「自分のもの」がさらにはっきりしこだわりが強まる
- ・自分と相手の関係の強弱が分かり始まる
- ・友だちの存在を意識することによって、自分で自分を励まして努力する

➡大人の声や合図のあわせた自己制御が出来はじまる



# 子ども集団の中で育つ 自己肯定感

幼児期の発達  
＝自我の育ちを中心に＝



# 発達を促す環境（3歳～4歳半）

自制心の芽生え・・・

大きくなったことへの誇り

- 受容的人間関係の中で
  - ・「手伝ってあげる」「やってあげる」と周りの様子をみながら大人のように振舞う
  - ・まだまだ反抗や拒否、落ち着きのなさを伴いながらも充実してきた自我が様々な場面で粘り強くやり抜こうとする

- 身体の内臓器官の感受性が豊かになる
  - 「オナカガ、スイタ」「オシッコガ、デソウダ」等の感覚を自ら敏感に感受し、表現し始める

## ◎ 言葉と交流

- 様々な感情や意志を**言葉**で伝えはじめる
- 新しい経験への期待が、「～シタイ」という言い方で表現する
- 親しい人なら電話を通して自分の要求や簡単な状況を伝えられる



## ◎ 自我と社会性

- ・自分から友だちのところに行き、長時間遊べるようになる。  
おもちゃの貸し借りや順番、交代ができるようになり、約束、依頼、もわかる
- ・同じ年齢の友だちとのケンカは我慢できないが、3歳後半になると自分より小さい子に顔をいじられても我慢したり、苦手なことも頑張ってみようとする力が発揮され始まる。
- ・基本的な生活行動が自分でできるようになり、身の自立が促される

## ◎社会的支援

3歳児健診を受けましょう



# 発達を促す環境（4歳半～5歳）

## 4歳児の自我・・・揺れ動く 4歳児

- 客観的な目で、自分を見つめなおす
- ・視野の広がった目で自分自身を見つめ直す
- ・リアルな認識の世界に入り込み始めてる
- ・人に褒められるだけでなく、自分が納得できる「褒められるに値する実績」をどうつくりださせていくのか
- ・外からの指令を大切に取り入れて、人から言われたことやルールを自分を通して実現しようという意識をし始める





## ◎ 言葉と交流

- ・複合文が完成し、語彙数が急増する
- ・不適切な言葉(バカ、オシッコ、ウンチ)など多用することによって、想像上の友だちを作りながら修正可能な世界を広げる
- ・「シバラク」「イッシュウカン」等時間感覚の表現が可能になり、さらに過去・未来を表現する
- ・年長児のしていることをみて真似ようとする

## ◎ 自我と社会性

- ・衣類の着脱やささまざまな身近自立を順序だててやろうとする
- ・自分より年少の子どもたちができることを次々と一緒にやり導く
- ・自制心が発揮され、同年齢同士の喧嘩では我慢しないが、小さい子に顔をつかまれても、我慢する
- ・まわりがみえ、自分が見える4歳児は「ぼくもああいうふうになりたい」というあこがれが生まれる。



**あこがれ**を持って頑張る力を大切にする。それは子どもたちが自分を育てるだけでなく、子どもが自分を大切にし、**自分を信頼する気持ち**である。

# 発達を促す環境(4歳半～5歳児)

自制心の発揮・・・2つの活動を切り替える力  
「～ダケレドモ～スル」

○ 2次元可逆操作の働き

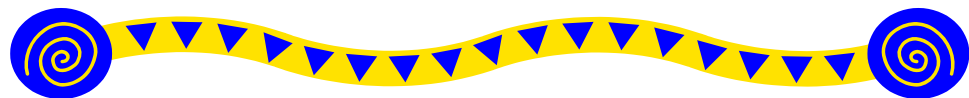
・内面世界の広がりをもとに役割が果たせる  
「寂しいケレドモお留守番をスル」



心配もし、喜びもこみ上げてくるようになり他人に伝えずにはいられない

## ◎ 言葉と交流

- ・「ダッテ」を使い、はっきりと自分の理由を言った主張になる
- ・「キョネンノナツ」・・・社会的な記憶や「イヤラシイ」「ナツカシイ」・・・社会的な複合感情が出てくる
- ・その日にあった出来事を接続詞を使って話し、言葉が生活の中で生きてくる







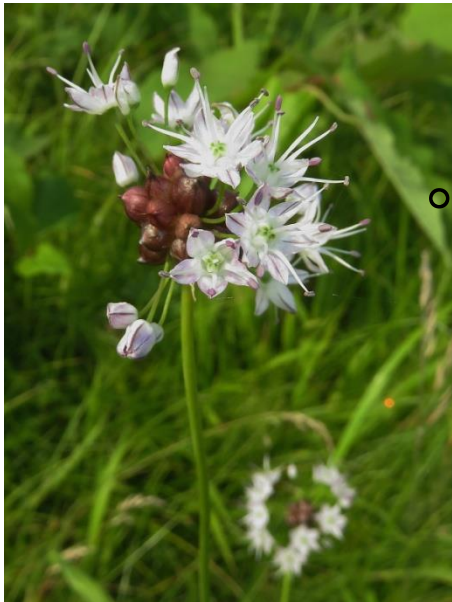
## ◎ 自我と社会性

積極的な自制心は、何にでも挑戦し、成果を受け入れる誇り高き自制心になる。

- 難し過ぎる課題ではなく、ちょっと頑張ればできる課題を出す
- 保育者の「がんばれ！」だけでなく、具体的であり、それによって「できそうだ！」という感触を体験できるようにする
- クラスのなかでは「できなくても笑われない」「みんなが僕を応援してくれている」というクラス集団への信頼があること

- 理由が分かって大人の評価に従って行動すること  
ともできるようになる。自分の理由を上回る理由を  
前にしたり、楽しみにしていた約束が破られると  
やり場のない怒りをぶつけてくる

- 仲間同士で手をつないで助け合うことができはじ  
まる。年少児の世話をし、導くこともできる  
。そのとき、相手と自分との共通点を引き  
出し、相違点を受容することもできる



# 発達を促す環境（5歳～5歳10ヶ月）

## 第3の新しい発達のカ・・・真ん中の発見

質的に異なる3つの活動を一度にまとめて  
表現するとともにその3つの活動を連続して  
切り替える力が芽生える

自分を中心に



空間的・・・（前・横・後からみた自分）  
時間的・・・（昔・今・将来の自分）  
力動的・・・（力の入れ方を強・中・弱）



## ◎言葉と交流

- 集団のルールに従って生活ができたり、集団あそびが盛り上がる
- 友だちとの言葉のやりとりができるようになり、自分の思いや気持ちを表現しあう
- 生活のルールを守ることによって気持ちよく過ごす心地良さが分かり始める
- 当番活動やグループ活動を責任を持ってやろうとしたり、やる意義が分かり、自分たちのことは自分たちでやることで自信がもてる

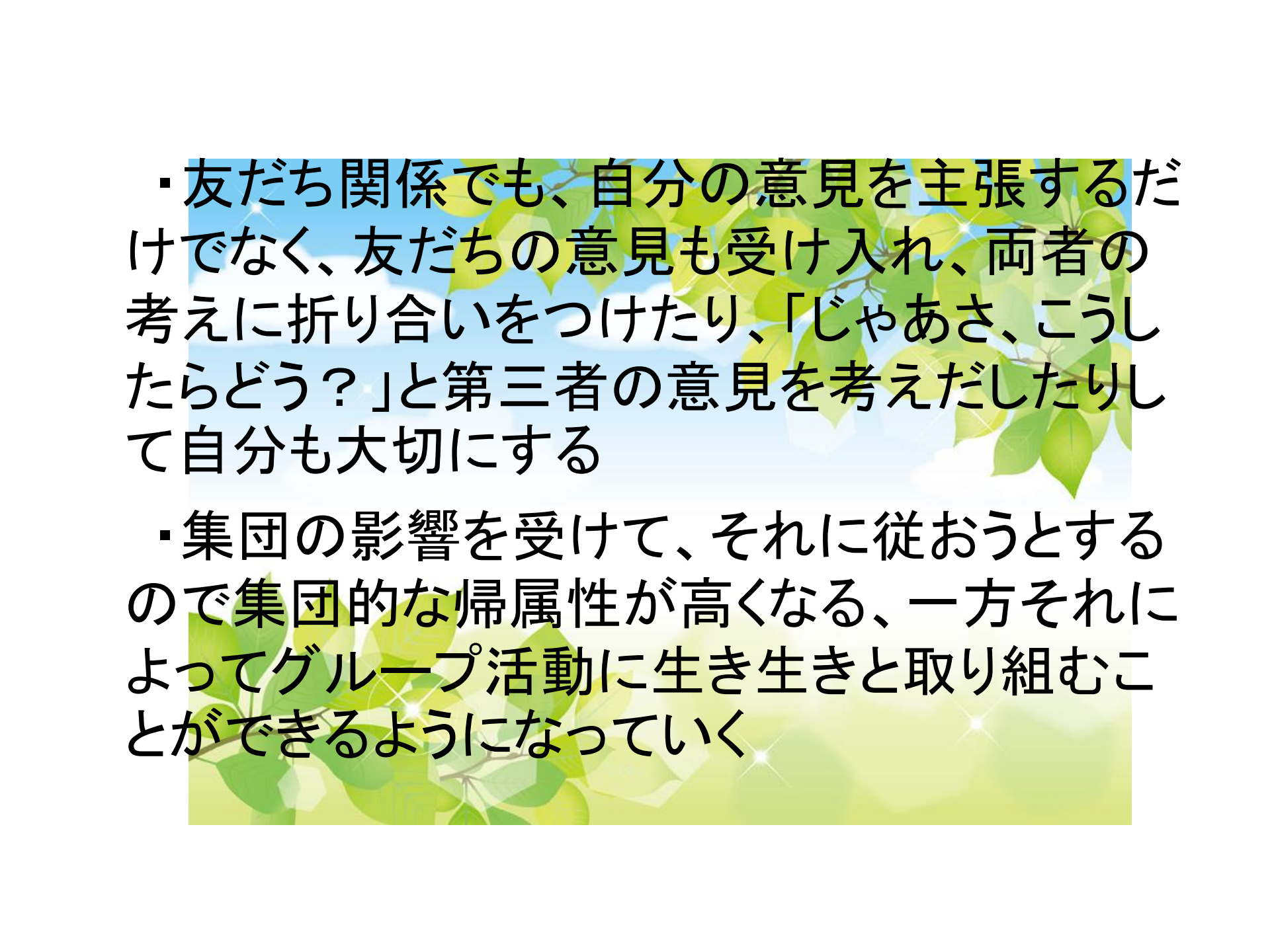


◎ 自我と社会性・・・自分を受け入れ、相手を知るゆとりある自我

- ・認識能力の育ちと人間関係の育ちに基礎づけられたゆとりある安定した姿が5歳児の自我

- ・自分を受容する自信を育てていく

できるかな？できないかな？という揺れを乗り越えこれまでの経験をもとに工夫したら出来るかも知れない、練習したらきっとできる、という見通しをもてる、できなくても自分がすべて否定されるわけではない、というゆとり



・友だち関係でも、自分の意見を主張するだけでなく、友だちの意見も受け入れ、両者の考えに折り合いをつけたり、「じゃあさ、こうしたらどう？」と第三者の意見を考えだしたりして自分も大切にする

・集団の影響を受けて、それに従おうとするので集団的な帰属性が高くなる、一方それによってグループ活動に生き生きと取り組むことができるようになっていく



# 発達を促す環境（5歳10ヶ月～6歳）

認め合い育ちあう・・・行動の前に思考し、思考した道筋に沿って行動し、さらに思考していく

## ○ 理（ことわり）そめし思考の力

- ・「～シナガラ順番ニ～スル」といった3次元の概念や活動の形成が充実期になる
- ・自分が主人公になって粘り強く活動し、行事の中でリーダーとして会を進めたり園の中心になって力を発揮する



## ◎ 言葉と交流

- ・目の前にいない人にも気持ちを伝えようとして「書き言葉」を身に付けて使い始める
- ・3次元(経験したこと、TVでみたこと、想像したこと)をまとめて1つの物語にする
- ・読、書、算を学ぶことに興味をもつ
- ・自分を客観視でき、自分の中に「ジブン」をとらえ、自己紹介でも多面的な認識をするとともに他者に対してもそれができ、相手のなかに「ジブン」を捉え認めます



## ◎自我と社会性《ルールに基づき判断ができる》

- ・同世代の友だちとの同一視がはじまり、目的性の強い遊びの種類や量、時間、友だちが増え、子ども同士で役割遊びやルールに基づく役割交代をする
- ・「良心」が目覚め、内的なルールを持ち、自発的な学習をしたり、約束を守ろうとしたり、相手の気持ちを察してあげることもでき始める
- ・みんなで行動して、失敗して泣いても保育者や友だちに理由を辿ってもらい受容と励ましがあると納得する。悲しむ力怒る力も豊になり、こらえ泣き、くやし泣き、うそ泣きなどもでき始める。

# あそびは子どもと子どもを結び、社会性を形成し、内面を育てる(まとめにかえて)

## 話し合い活動 ……内面を育てる

- ・あそびの中でのトラブルをみんなで話し合う「一人の意見をみんなが聴いている」という経験は、“自分がみんなに受けとめられている”という集団のなかでの**安心感**や友だちへの**信頼感**を育む
- ・知的な力を成長させるために重要な活動
- ・子ども同士のコミュニケーションを育む

- ・ゆたかな経験と言葉でテーマとされていることを自覚しながら、まとめていく活動であり、認識の成長にきわめて重要。

- ・一人では得られない多様な考えに触れ、自分の思いを表現することができる

- ・あそびの中で、「教える」「教えられる」という相互援助の関係ができ、その力は友だちへの信頼や尊敬の念を育て、友だちとの強い絆をつくり、友だちを大切にする気持ちや人を信じる気持ちが育つ

・集団であそぶことで、友だちとのぶつかり合い、葛藤を乗り越え、社会性を身につけたり、規範意識を身につけていく。

また、自分の存在の重要性を肯定するまでに成長し、友だちを認めることもできるようになっていくのである。

**総合活動**・・・長い期間、どんなことをして遊ぶか考え、話し合い、あそびをつくりあげていく活動である。